

<コラム>

エイムズ唯子の「心理学の周辺」

第13回：「魚釣りとかぎ針編み」の巻

あれはアメリカだったか、カナダだったか忘れてしまいましたが、“Gone fishing!”（釣りに行って留守です）と書かれたプレートが閉まったオフィスのドアにかかっている「？」と思ったことがあります。遊びに行ったにしては、ずいぶん具体的なメッセージ。夕飯のおかずに魚が必要なのかしら？

今年9月の休暇。夫の両親とカナダの湖畔にコテージを借り、1週間の魚釣り生活をしました。そしてGone fishing!の心境が、ちょっと変わったような気がしました。釣り糸をたれて魚を待つということは、積極的に、無責任にヒマすることなんだと。糸や浮きのかすかな動きで魚の気配を察知するためには、しゃべらず、動かないのが一番。頭を空っぽにしても、立派な釣り人です。魚がとれなかったとしても、風や波や魚のご機嫌のせいにはできません。活動的で生産的であることを求められる日常にあって、なんて自由で安らぐ時間なのでしょう。まるで魚が泳いでいるのにあわせて、自分の意識や存在自体も、制約を解き放って泳がせるかのようです。

しかし、ちょっと困ったことも起こりました。夫たちが積極的に、無責任にヒマしている間、妻たちはどうすればいいのか、という問題です。夫の母は水が怖いし、私は餌のみみずが触れないのです。ボートを漕ぎ出して行った夫たちのお腹の空き具合を考え、食事を作り、ふたりの帰りを待つばかりでは、さすがにつまらない。

妻だって積極的に、無責任にヒマしたいわ！と思った私は町に出かけ、夫の母と自分のために毛糸と編み針を買ってきました。コースターだの小物入れだの、あってもなくてもよいようなものをとにかく作るという策です。これはうまくいきました！かぎ針編みというのは、魚釣りに出かけた男たちを待つ女たちが、釣り針を見て、私も金属の棒の先をちょっと折り曲げて糸をひっかけてみたら、なにか面白いことができないかしらと考えだしたに違いありま

せん！（ほんまかいな）

「ジェンダー論をつかむ」（有斐閣）という新刊書の書評を依頼され、行きの飛行機の中で読んだばかりだったのですが、男たちの魚釣り活動にあわせて料理→洗い物→編み物→料理…を繰り返していると「性別役割分業」という言葉が、つつと頭をよぎって行きました。同書によれば性別役割分業は、戸籍や世帯、家族賃金（男性世帯主が家族全員が暮らしていけるだけの給料を貰うこと）といった政治的・経済的背景を強固に持っているのだそうです。

ただ、今回の魚釣りパケーションの背景は、夫が子どもの頃、父に釣りに連れて行ってもらえなかったことにありました。夫の父は腕のよいエンジニアで無類の働き者です。父方の祖父は大恐慌時代に苦勞をし、貧しさの中で父を厳しく育てた人でした。そんな父が、30代の働き盛りに積極的に、無責任にヒマできるはずもなかったのです。夫の母との編み針を動かしながらのおしゃべりで、母の心情をうかがい知ることもできました。母もまた、幼い息子たちの気持ちを知りつつ、働ける限り働き、家族を養うため必死に生きてきた人でした。

魚釣りとかぎ針編みに象徴された格好の、期間限定の性別役割分業生活は、その単純さが新鮮で、新たな活力をもたらしてくれました。家族の物語という大きな文脈を共有することもできた気がします。



満悦の釣り人達

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）